シベリアの追憶

島根県　中島止義

私は、大正十四年二月十八日、大田市三瓶町池田三二〇―六で出生し、村の小学校を卒業後、一時農業に従事していたが、昭和十七年八月から入隊直前まで、山口県の軍需工場である光工廠で働いておりました。

私は、昭和十九年一月、現役志願して、関東軍入隊のため広島西練兵場へ集結、各旅館に分宿した。その間、兵器被服類の支給を受け、現地入隊のため、一月中旬、歩兵十個中隊の補充要員として、下関港から金剛丸で博多へ着く。そこで野戦砲兵三個中隊、工兵一個中隊と合流して出港。朝鮮半島を縦断し渡満する。満州は間島省琿春七七二部隊甲賀隊へ入隊した。それから十二月には新設部隊へ転属。

二十年三月には下士官候補者として、ハルビン第二六三部隊（技術教育隊）へ入隊したが、教育期間中終戦を迎える。我々全く戦闘状態に入ることなく、八月十八日ハルビン郊外の平和公園で武装解除を受けたが、まさか日本が負けるとは露知らず、残念無念、全身の力が抜け、初めてこんな情けない思いをした。

八月末になり、海林収容所へ徒歩で移動したが、到着して二～三時間後、ソ連兵が私物検査と称し、装具の中を掻き回し、目ぼしい物は全部取り上げてしまった。ここで勝者と敗者がはっきり区別され、無教育で無節操の若いソ連兵の行動に新たな憤りを感じ、我が身の不運を嘆く。

海林に来て一カ月くらいたってから、昭和二十年十一月、牡丹江駅に向かう。ここで一千名単位の集団が編成され、第一一〇作業大隊と名付ける。しばらくして、駅から有蓋車に乗せられたが、すし詰めの状態で中は真っ暗である。満州の夜は雪明かりで外は明るく、国境の街綏芬河を左に見て黒龍江を船で渡り、ソ連領に入る。そしてシベリア鉄道を何日間か走り続け、目的地に到着したらしく列車は止まる。皆、小窓から外を見ると、一面の銀世界で積雪三〇センチ以上あるよ

うだ。

そのうち下車命令があり外に出たが、朝の九時か十時ごろだったと思う。すぐ目の前に収容所らしき建物があり、全員整列して人員点呼をうける。数千名の人員は五百人単位に分散して奥地の収容所へ行かせられる。私はタイセット第七分所に所属することになった。

また、所持品の検査が始まる。広場の雪の上に品物を並べ、ソ連兵が一人一人調べる。珍しい物があれば、自分のポケットに入れるので、上衣もズボンもいっぱいとなり、まるで強奪者でソ連軍の軍紀は全然なく、あきれて物が言えない。これで自分たちの持ち物は一切なくなり、せいせいした。検査が終わってからも雪の上で腰をおろして待つが寒くてやり切れない。何時間経過したか、ようやく屋内に入る。宿舎といっても日本の牛小屋よりも汚い建物だが外よりはよい。中は真っ暗で何も見えず、目が慣れると先着組約三十人、作業に出ないで待機しているようだが、どこの部隊かわからない。よく聞いてみると病弱者で栄養失調の人たちであった。

翌日から建築用の松の伐採作業に入ったが、ノルマを達成しないと帰してくれず「ヤポンスキーブィストラ」と言ってソ連人の監督が物すごい形相で怒鳴る。食事は黒パン二五〇グラム、水のようなスープ、二〇代の若者にとっては、力の原動力にならず、働く意欲が出るはずがない。

毎日朝七時の夜明け前に食事をすませて広場へ集合、人員点呼をして各中隊ごとに作業現場へ行くのが日課となる。松や樅の木を二人一組で「タポール」(なた)で枝を切り払い、四メートルから十五メートルの長さに輪切る。毎日この作業を続けているうちに、私も栄養失調者になり、鋸の目立て、タポールの研磨など、軽作業をすることになった。

昭和二十一年四月になると、二〇八キロ離れた第二十分所へ転属、相変わらず伐採作業中、技術者の調査があった。私は入隊前海軍工廠にいたので、製鋼、溶接の技術を習得しており、同年八月ごろさらに一七五キロ離れた場所で鉄橋の仕上げ作業班に入る。鉄道の貨車が宿舎で人員は十五名くらいであったと思う。監

督は政治部員であって、陸軍技術将校でモスクワから派遣され、三十歳くらいの有能な青年である。作業内容は組立てだ。鉄橋のボルトを外すのはソ連人二人、日本人一人で、全部ではなく緩んでいる箇所だけにする。ロシア人は緩んでいるか、締まっているかを、ボルトの頭を叩いただけでは分からず、日本人の技術者が点検して日印をしてから外していた。

リベット焼も三人一組で、火が真っ赤なうちにつけ、ノルマは八時間で一五〇本くらいが標準であったが、仕事は大変神経を使い、きつい労働である。これを、一五〇本から三〇〇本つけたときは、「ヤポンスキー、ハラショ、ラボーター」と大喜びで、ウオッカを一緒に飲み、マホルカ（たばこ）をくれたこともあった。この地の鉄橋が完成すると、次は二三〇キロ離れた別の場所で同じ工程の作業をした。ある日、作業中、監督将校が給料を支給するから事務室に来いと言われ、行くと一五〇ルーブルずつ初めてもらい、金の有り難さを感じた。

昭和二十四年七月上旬、政治部将校の全員集合の言葉に何事かと作業場から地上に下り、いつものとおり彼を中心に輪を作る。「ヤポンスキー、東京ダモイになったから、早く宿舎に帰って準備するようにと司令部から伝令が来た」と知らせてくれて、全員万歳と飛び上がって喜び、心は故郷へ飛ぶ。

この地点から、タイセットまで一週間くらいかかり、七月十日未明、貨車で出発、一路ナホトカに向かい、着いたのが七月二十日ころだったと思う。

ところが今まで思想教育をうけたことがなく、私たちも何も知らなかったが、ここで特訓の学習することになり、日本人のアクチブに朝八時から午後四時ごろまで、約二週間くらい鍛えられた。

時々、収容所の中庭で大声を上げているので、何事かと見ると、二重三重の輪のなかで、反動分子の吊るし上げが行われており、帰国を前にして嫌な感じだった。長かった速成教育が終了して、すぐに昭和二十四年八月四日、「信濃丸」に乗船でき、夢のようで私の人生最高の出来事だった。

そして何年ぶりかに見る日本の看護婦さんの笑顔、

日の丸の旗など、深く印象に残っている。

船内はアジ演説もなく、至って無事平穏、八月七日舞鶴港に感激の入港した。ここの海軍兵舎で復員手続等でしばらく滞在して、一路故郷へ。盛大な出迎えをうけて、七年ぶりに我が家へ着く。

復員後は農業をしながら市内の会社へ勤め、妻子にも健康にも恵まれ現在に至っている。

最後に、今でも思うことは、五十年前、酷寒のシベリアで飢えと寒さに加え重労働で死没した戦友の皆さんの御冥福を心から祈る次第である。

帰国後も後遺症に悩む

長野県　伊藤菊次

昭和十年徴兵検査の結果、甲種合格、徴集免除となる。日支事変が始まった昭和十二年十一月、充員召集により松本輜重隊に入隊。一ヵ月後、南支方面に派遣されるべく広島より輸送船に乗り出港するも、英国艦隊に阻まれ、急遽台湾に変更し上陸、任務につく。三月に召集解除となり帰郷する。

昭和十六年七月、関東軍特殊演習参加の名目により再度召集を受け、金沢の輜重隊に入隊する。一ヵ月足らずで牡丹江省樺林輜重隊第四中隊に編入になる。昭和十九年五月、南方派遣の命により釜山に集結するも、戦局険しく出港を断念し原隊に復帰する。昭和十九年十月、ハイラル第一一九師団に編入。翌二十年六月より興安嶺の山中に陣地を構築。ソ連軍の進攻を迎え撃つべく準備中、終戦となる。八月二十日ごろ、博克図に集結せよとの命令により武装解除の後、博克図の収容所に入り帰国を待こととなる。

約一ヵ月後、九月十七日、輜重第一一九連隊を中心に連隊長以下千五百名の第二作業大隊が編成され、二段に仕切られた貨車に乗る。列車はなかなか発車せず、この間いろいろな話が飛び交う。日本へ帰れると言う人、いやどうもソ連へ連れて行かれるのではないか……。不安の数時間が過ぎ暗闇が迫るころ、ようやく動き出す。いずれの方向へ向かっているのか見当もつかない。